

近世鹿児島における磁器窯場間の技術交流

渡 辺 芳 郎

はじめに

近世鹿児島における磁器生産は、17世紀において加治木町山元窯（関編1995）や始良町元立院窯（下鶴編1995）などで試みられており、また豎野系窯場でも焼かれていたと推定されているが（田沢・小山1941 pp.109-112）、いずれも短命に終わるか、あるいは陶器生産を主体とする中で、部分的に磁器が焼かれていたという程度にとどまる。

しかし18世紀後半になると、天草陶石が供給されるようになり、磁器の本格的生産が始まる。その代表的な窯場として川内市平佐焼（川内市歴史資料館編2000など）が挙げられるが、そのほかにも加治木町弥勒窯（関編2001）・日本山窯（田沢・小山1941 pp.218-220, 2001年加治木町教育委員会発掘調査）、東市来町美山（苗代川）南京皿山窯（田沢・小山1941 pp.215-218, 出口2002）、阿久根市脇本窯（池水1978）・大曲（阿久根皿山）窯（関2001）、始良町重富皿山窯（深野2002）など、18世紀後半から19世紀にかけて、複数の磁器窯が操業していたことが確認されている。また苗代川ではウチコク窯・御定式窯などでも、陶器とともに磁器が焼かれていたと推測されている（田沢・小山1941 pp.183-189）。これら磁器窯の興隆は、当時の藩による財政再建を企図した産業育成策の一端を示すものであろう。

さて磁器窯開窯の際には、肥前地方などから技術導入がはかれるとともに、藩内の磁器窯場間でも陶工の移動をともなう技術交流が行われていた。筆者はかつて、その技術交流について若干触れたことがあるが（渡辺・関・下鶴2000 p.372, 渡辺2000 b p.47）、本稿では、窯神石塔の銘文などを手がかりとしながら、より具体的に検討してみたい。その際、文中でも触れるようにいくつかの先学の成果を踏まえていることを明記しておきたい。

1 他藩からの技術導入

(1) 肥前・肥後と平佐焼

川内市天辰に所在する平佐焼窯は、これまで天明6年(1786)開窯とされていたが(田沢・小山1941など)、近年の調査研究で、安永年間(1772-81)頃までさかのぼる可能性が改めて指摘されている(小島1999・2000)。開窯年代についてはここでは詳しく触れないが、その開窯に際して、肥前や天草から技術導入をはかったことが、「皿山磁器製造所沿革」と「磁器製造所由緒」(ともに『薩陶製蒐録』所収)に記されている。

「皿山磁器製造所沿革」(明治18年(1885))

「(前略)安永年中平佐郷領主北郷某家臣伊地知某ニ命シテ、肥前國有田ヨリ陶工師ヲ聘シテ磁器製造ノ業ヲ創メ(後略)」(下線渡辺)

「薩摩郡平佐郷天辰村ニアリ磁器製造所由緒」(明治19年(1886))

「(前略)明和ノ初年ニ至リ、肥前ノ國有田并ニ肥後國天草辺ヨリ陶器師若干名ヲ聘シ磁器ノ製造所ヲ設立シ(後略)」(下線渡辺)

また「明治三十三年三月 星山貞恒」の署名のある「薩摩焼傳來ノ畧記」(『薩藩旧記』所収)中の「五代(星山仲次-渡辺)金致」(宝暦2年(1752)家督相統一同書より)の項に、年代は不詳ながら、「脇元」にあった窯を川内平佐に移した際、天草地方の男女15~16人を招いたと記されている⁽¹⁾。

以上の記述はいずれも同時代史料とは言い難いが、平佐焼開窯にあたって、肥前有田や肥後天草から技術導入をはかったと伝えている。有田の陶工が来鹿していたことを示す他の資料は現段階では確認していないが、天草との関係については、天草で陶石を商った庄屋・上田家が、18世紀後半、平佐焼窯場に技術援助を申し出た文書が伝わっている(川内市歴史資料館編2000 p.10)。また文化14年(1817)の『上田宜珍日記』には、その38年前(安永8年(1779)頃)天草の絵師・清水与右衛門(旧名：四郎七)が平佐に移り、永住したと記している(平田編1993 p.169, 川内市立歴史資料館編2000 p.6, 小島2000 p.38)。

さらに平佐焼窯跡近傍に所在する皿山墓地には、寛政5年(1793)銘の「肥前國長与村之／富永利頭太／妻」の墓石が残っており(図1)、その隣には寛政

